

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

騎士道物語としての『気風のいいイスパニア人』に関する考察

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 竜仁, Nomura, Ryuji メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1529 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



騎士道物語としての『気風のいいイスパニア人』 に関する考察

野村 竜仁

1. はじめに

セルバンテスにとって、劇作家としての成功は果たしえぬ夢であったに違いない。アルジェでの投獄生活の後、作家として身を立てることを目指したセルバンテスは、牧人小説『ガラテア』を上梓するとともに、「20、30篇のコメディアを書き、どの作品も胡瓜を見舞われたり、他のものを投げつけられることもなく上演することができた。口笛も、罵声も浴びせられることはなく、『止めろ』の聲に中断することもなかった」¹。この時期の戯曲として確認されているのは、『アルジェール生活』と『ヌマンシアの包囲』のみである²。その後、「ほかにやるべきことがあったので、芝居の世界から身を引いた」³が、セルバンテスが従事したのは、無敵艦隊のために物資を徴発するという、労多く功少ない仕事であった⁴。1587年にセビリアへ向かい、1590年にはインディアスでの仕官を願い出たものかなえられず⁵、1594年に無敵艦隊での任務を解かれると、徴税吏となる⁶。この間セルバンテスが筆を執ることはなかったのか、詳らかではない。しかし1592年にセビリアで戯曲の執筆契約を交わしていることから、戯曲を書く意思を完全に捨てていなかったことは間違いないだろう⁷。

『ドン・キホーテ』の評判によって作家としての地歩を得た後、ふたたび劇作家としての成功を目指す。しかし「かつて自分が人気を博した時代が今でもまだ続いているものと信じ、昔暇つぶしに手掛けていたことをもう一度やって

1 Miguel de Cervantes, *Obra completa 13*, Ed. de Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas, Madrid, Alianza Editorial, 1997, p.14.

日本語訳は以下より。

高橋博幸, 「セルバンテスと『新しい演劇』」, 『「ドン・キホーテ」事典』, 行路社, 2005年, p.348.

2 *Obra completa 13*, *op. cit.*, p.V.

3 *Ibid.*, p.14.

日本語訳は以下より。

佐竹謙一, 『スペイン黄金世紀の大衆演劇』, 三省堂, 2001年, p.63.

4 ジャン・カナヴァッジオ, 『セルバンテス』(円子千代訳), 法政大学出版局, 2000年, pp.196-197.

5 同上, pp.216-219.

6 同上, p.233.

7 *Obra completa 13*, *op. cit.*, pp.VII-IX.

みようと考え、コメディアを何篇か書いてみた。だが、柳の下にいつも泥鰯はいない」⁸。興行主 (autor) たちは、セルバンテスの戯曲には目を向けなかった。

彼らにはお気に入りの詩人たちがいて、彼らとつるんでうまくやっているんです。だから彼ら以上のものを、あえて見つけだそうなどとは思ってはいませんよ。でも小生は作品を早く印刷に付したいと思っています⁹。

こうして上演される見込みのない作品が『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』として刊行された。本稿で取り上げる『気風のいいイスパニア人』(*El gallardo español*) も、その中に収められている。

当時のスペイン演劇界では、ロペ・デ・ベータを頂点とする大衆演劇、いわゆる「新しい演劇」(*comedia nueva*) が最盛期を迎えようとしていた。当初セルバンテスは、こうした「新しい演劇」に否定的であった。しかし晩年にはその隆盛を受け入れざるを得なかったのか、『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』に収められた作品では、ロペ的な作風を見ることができる¹⁰。ただしそれは単なる迎合ではなく、セルバンテス流の、ある種の革新性が加味されている。たとえばロペの戯曲では、人物や社会が理想化されて描かれる傾向があり、男女の結婚による大団円などもその一例と言えるだろうが、こうした理想化に対して、セルバンテスはその虚偽性をアイロニカルに描いている¹¹。

セルバンテスの戯曲には、演劇的でない、小説的とも言える手法が用いられている。視覚だけでなく聴覚、つまり語りや描写に頼る傾向があり¹²、こうした手法は『気風のいいイスパニア人』においても見ることができる。『ドン・キホーテ』で語られる旅籠での捕虜の話のごとく、登場人物がみずからの来歴について長々と述べる場面があり、他の登場人物たちはその話に耳を傾ける。彼らは舞台上の演じ手というよりも、小説中の語り手あるいは聞き手のようにふ

8 *Ibid.*, p.16.

日本語訳は以下より。

前掲佐竹謙一, p.67.

9 Miguel de Cervantes, *Obra completa III*, Ed. de Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas, Alcalá de Henares, Centro de Estudios Cervantinos, 1995, p.1350.

日本語訳は以下より。

ミゲル・デ・セルバンテス, 『ラ・ガラテア／パルナソ山への旅』(本田誠二訳), 行路社, 1999年, pp.432-433.

10 前掲高橋博幸, pp.353-354.

11 Stanislav Zimic, *El teatro de Cervantes*, Madrid, Editorial Castalia, 1992, p.22.

12 Stanislav Zimic, «Sobre la técnica dramática de Cervantes en *El gallardo español*», *Boletín de la Real Academia Española*, LIV (1974), p.506.

るまう¹³。また、ひとつのエピソードの結末が示されないまま別のエピソードが挿入される展開なども小説的と言える手法で、小説では読者の興味を引き付けることができるものの、読み返しのできない戯曲には適していない¹⁴。

こうした小説的な手法は、上演の意図がなかったことの裏返しと言えるかもしれない。セルバンテスの戯曲は、革新的であったとしても時流に乗ることはなかった。『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』の作品は上演の機会を得られず、題名にもそのことが示されている。『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』(*Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados*)は、ロペ風の「新しい演劇」に従わない新しい(nuevos)要素が加味されており、そのために舞台にかからなかった(nunca representados)作品集と言える¹⁵。

カナヴァッジオによれば、『気風のいいイスパニア人』の執筆時期はセルバンテスがマドリードに居を構えた晩年の、1606年から1610年頃とされる¹⁶。この戯曲は、『アルジェール生活』、『アルジェールの牢獄』、『偉大なるトルコ皇妃』とともに、捕虜としてのセルバンテスの自伝的な要素が投影されていると言われる¹⁷。レパントの海戦の後、アルジェで捕虜生活を送ったセルバンテスは、1580年にスペインに帰国し、その翌年フェリペ二世の命でオランに赴いている¹⁸。『気風のいいイスパニア人』の舞台となるオランは、セルバンテスが捕虜だった時代に、逃亡先として目指した場所でもあった¹⁹。

現在アルジェリア領であるオランは、1509年、枢機卿シスネロスに率いられたスペイン軍によって占領され、1708年までその統治下におかれた。1563年、このオランをめぐるスペインとオスマン帝国の攻防戦が繰り広げられており、この戦いが『気風のいいイスパニア人』の歴史的背景となっている。

オランに関するセルバンテスの知識は、バルタサール・デ・モラレスの『オランの戦いに関する対話』(*El diálogo de las guerras de Orán*)やその他の資料を参照した可能性、また彼自身の知見に基づくとする意見も示されている²⁰。こうした歴史的事実としての観点から『気風のいいイスパニア人』について検討することもできるが²¹、本稿では、スタニスラフ・シミッチの解釈に注目し、セ

13 *Ibid.*, p.511.

14 *Ibid.*, p.510.

15 *Obra completa 13, op. cit.*, p.III.

16 *Ibid.*, p.IX.

17 *Ibid.*, p.XIV.

18 前掲ジャン・カナヴァッジオ, p.138.

19 同上, p.112.

20 Stanislav Zimic, «El libro de caballerías de Cervantes», *Acta neophilologica* (1975), p.3.

21 Réda Abi-Ayad, «El gallardo español: entre realidad histórica y ficción literaria», *Iberoamerica Global*, I, núm. 3(2008), p.244.

ルバンテスの作品としての意味を考えてみたい。シミッチはこの作品が、『ドン・キホーテ』と同じく、新たな騎士道物語への試みであると指摘している²²。このシミッチの見解をふまえつつ、『気風のいいイスパニア人』の騎士道物語としての側面について、若干の考察を加えてみたい。

2. 『気風のいいイスパニア人』で描かれる騎士像

『気風のいいイスパニア人』は、オランに駐留するスペイン軍の騎士、フェルナンド・デ・サアベドラを主人公とした物語である。すでに述べたように、この戯曲はセルバンテスの捕虜としての経験が投影された作品のひとつと評されており、また主人公がサアベドラという名前を持ち、人を傷つけてイタリアへ向かう展開なども、作者セルバンテス自身を髣髴とさせる²³。

フェルナンドの武勇は、敵であるイスラム教徒たちの耳にも届き、それを聞きつけたイスラム教徒の美姫アルラハは、彼女に思いを寄せるイスラム教徒の騎士アリムセルに対して、彼の求婚を受け入れる条件として、フェルナンドを捕虜として連れてくることを求める。アリムセルはスペイン軍が守るオランの城壁へ赴き、フェルナンドに対して一騎打ちを申し出る。

オランを治めるアルカウデテ伯ドン・アロンソ・デ・コルドバは、防衛の義務をないがしろにするものとして、フェルナンドがアリムセルの挑戦を受けることを認めない。しかしフェルナンドは戦いにのぞむことを決意し、友人グスマンを介して、挑戦を受ける旨を伝える。しかしアリムセルと同じくアルラハを慕い、マホメットの子孫だが臆病なナコールは、恋敵を陥れるために甘言を弄して、決闘が実現する前にアリムセルを戦いの場から引き揚げさせてしまう。

フェルナンドは、アリムセルとの戦いの機会を得るため、イスラム教徒の部隊に投降する。アルラハのもとに連行されたフェルナンドは、素性を偽り、フェルナンドの友人フアン・ロサーノと称して、彼の武勲を疑うアルラハに反論する。またアリムセルの挑戦に応じなかったという非難に対して、友人のふりをしながら自己弁護し、加えてナコールの姦計を指摘する。

ナコールは自らの勇猛さを誇示するため、フェルナンドに戦いを挑むと宣言する。しかしその言葉とは裏腹に、敵であるキリスト教徒に対して味方を攻めるように持ちかけ、その見返りとしてアルラハを我が物にしようとする。アルラハは、ナコールの裏切りによって自分が囚われる夢を見ておびえるが、フェルナンドは彼女を守ることを約束する。そしてキリスト教徒が攻めてくると、

22 *El teatro de Cervantes, op. cit.*, p.93.

23 前掲ジャン・カナヴァッジオ, p.60.

彼らと刃を交え、異教徒であるアリムセルを助ける。この闘いの中で、フェルナンドは男装した女性マルガリータと出会う。

スペイン貴族の娘でありながら男の姿に身をやつすマルガリータは、彼女の養育係ボスメディアノとともに、フェルナンドと出会うために旅をつづけていた。かつてフェルナンドは、マルガリータの兄フアンに対して彼女との結婚の意思を示したところ、拒絶され、それが原因でいさかいとなり、フアンに傷を負わせてスペインをあとにしていた。マルガリータは修道院での生活を強いられていたが、アルラハと同じく、フェルナンドの名声を聞いて思いを寄せるようになり、彼を求めて修道院を抜け出す。マルガリータとボスメディアノはオランへ赴き、そこでフェルナンドがイスラム教徒側に寝返ったという噂を聞き、フェルナンドと出会う機会を得るために、マルガリータはみずからイスラム教徒の捕虜となる。

こうしてマルガリータの素性が明らかになる一方で、事態は緊迫の度合いを増してゆく。ハッサン・パシャ率いるイスラム教徒の軍が、オランに隣接するマサルキビルを包囲し、攻撃を開始する。スペイン軍の危機を前にして、フェルナンドは偽りの姿を捨て、防衛に立ちあがる。そして闘いの中でアリムセルを退け、敵方の王のひとり不倒す。フェルナンドが奮闘する中、アルバロ・デ・バサンとフランシスコ・デ・メンドサ率いる艦隊が援軍として到来し、スペイン軍に勝利がもたらされる。

勝敗が決した後、フェルナンドは自分の身をアリムセルに委ねる。理由は、アリムセルが騎士としての名誉を得て、アルラハの手を取るためであった。さらにフェルナンド自身も、マルガリータの兄で、イスラム教徒の捕虜となっていたフアンに対して、彼女を妻とすることを認めるように求める。彼の望みはかなえられ、フェルナンドとマルガリータ、アリムセルとアルラハが結ばれて、物語が終結する。

カサルドウエロは、この戯曲におけるフェルナンドの行動に、当時のスペインにおける英雄的精神の発露を見ている²⁴。しかしこうした見方に対して、ウィリアム・スタップは別のフェルナンド像を提起している。スタップによれば、フェルナンドは、勇猛ではあるが行動に一貫性がなく、敵に与することも辞さない²⁵。フェルナンドには「*inconstante* (志操堅固でない)」点があり、同じ名前ではあるが、カルデロンの『不屈の王子』(*El príncipe constante*)の主人公の

24 Joaquín Casaldueiro, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid, Editorial Gredos, 1966, pp.54-55.

25 William A. Stapp, «*El gallardo español. La fama como arbitrio de la realidad*», en *Cervantes, su obra y su mundo, Actas del I congreso internacional sobre Cervantes*, Madrid, EDI-6, 1981, p.266.

ような、志操の堅固さに欠けている。

『気風のいいイスパニア人』は、フェルナンドの活躍を単純に描いたというよりも、その名声をめぐって展開する物語である²⁶。セルバンテスの戯曲における名声については、グスタボ・コレアがいくつかの視点から論じており、その中で **vertical** と **horizontal** という区分を設定している。前者は、たとえば書物や文学として語り継がれる、時間を超越する栄光であり、後者は **honra** (面目) など世評に近いものとしてとらえられている²⁷。前者を通時的、後者を共時的とすることもできるかもしれない。『気風のいいイスパニア人』の物語は、フェルナンドの **horizontal** な名声によって動機づけられたものと言えるが、それは最終的にスペイン人たちの命運と、男女の関係を統べる情熱の運命に帰着する²⁸。こうした点から、コレアは『気風のいいイスパニア人』について、『ヌマンシアの包囲』などと同じく **vertical** な名声が描かれているとする²⁹。

作品の冒頭からフェルナンドは **horizontal** な名声を得ているが、その名声は彼自身の行動ではなく、周囲の伝聞によって示される。アルラハやマルガリータの行動は、この伝聞による名声に誘発されたものであり、さらにフェルナンド自身の動機もそこに起因する。

フェルナンドは、みずからの名声が生みだした世評に応じる必要性を感じており、ある意味ではその犠牲者とも言える³⁰。臣下として占領地の防衛という国王への義務を果たさなければならぬが、挑戦に応じなければ騎士としての名声に傷がつく。『気風のいいイスパニア人』は、この二つの選択肢を提示された主人公が、みずからの名声をいかに立証するかについての物語であり、結論としては後者を選択し、さらにもう一方の義務をも全うすることになる。

こうしたフェルナンドの物語を、シミッチは「新しい騎士道物語」として読み解いている。この指摘を踏まえつつ、必ずしも英雄的精神の発露とは言い切れないフェルナンドの行動と、その騎士道物語的側面について、再考してみよう。

3. 騎士道物語としての側面

『ドン・キホーテ』の前篇に、聖堂参事会員と司祭の間で演劇論が交わされ

26 *Obra completa 13, op. cit., p.XVIII.*

27 Gustavo Correa, «El concepto de la fama en el teatro de Cervantes», *Hispanic Review*, XXVII (1959), pp.280-286.

28 *Ibid.*, p.292.

29 *Ibid.*, p.302.

30 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, p.18.

る場面がある。当時の演劇界への批判とも言える内容だが、その前段として、騎士道物語が俎上に載せられる。聖堂参事会員は、基本的に騎士道物語に対して否定的な見解を示しているが、「あれにも良いところがある」として、「すぐれた才知にとっては格好のジャンルである」³¹ことを認めている。

なぜなら、騎士道物語というゆったりとした広大な場にあっては、作者はなに憚ることもなく、思う存分にペンを走らせることができるからだ。あるいは激しい嵐による難船や、大小さまざまな合戦の場面を描くかと思えば、必要なあらゆる条件をそなえた勇敢な指揮官、つまり、敵の策謀を見抜くにたけた知将にして、部下の兵隊の激励や説得においては巧みな雄弁家、戦略に長じ、決断は迅速で、攻守の両面において果敢きわまりない指揮官を描くこともできる。あるいはまた、嘆かわしくも悲惨な出来事を描くかと思えば、愉快な、思いもかけぬことを記すこともできよう。そこに、しとやかにして聡明な、そして慎み深い絶世の美女が登場したかと思うと、ここには、キリスト教徒の勇敢にして礼節をわきまえた騎士、あそこには、居丈高でがさつな野蛮人、こちらには、いんぎんで人望のあつい立派な君主が現われる。このように続いていけば、善良で忠実な臣下の姿や、王侯貴族の寛仁大度をいくらでも記述できる。また時には作者は、占星術師になったり、卓越した宇宙学者、音楽家、国情に通じた政治家になったりすることができ、その気にさえなれば交霊術師にさえなれるであろう³²。

この一節は『ペルシーレス』に言及しているとされるが³³、シミッチによれば、内容としては『気風のいいイスパニア人』にも当てはまり、当初この戯曲が散文作品として書かれていた可能性を指摘している³⁴。

シミッチの主張する「新しい騎士道物語」とは、悪しき要素、つまり非現実的な要素を取り除いた、より真実性のある物語ということになるだろう。周知のように、当時は物語における真実性への関心が高まった時代であり、騎士道物語についても、その虚偽性がしばしば批判された³⁵。シミッチは、知識人からの真実性の要請に応えつつ、読者に驚きを与えることがセルバンテスの目的

31 ミゲル・デ・セルバンテス、『新訳ドン・キホーテ [前篇]』（牛島信明訳）、岩波書店、1999、p.521.

32 同上、pp.521-522.

33 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, pp.5-6.

34 *Ibid.*, p.6.

35 アメリコ・カストロ、『セルバンテスの思想』（本田誠二訳）、法政大学出版局、2004、pp.80-81.

であったと主張する³⁶。

すでに述べたように、『気風のいいイスパニア人』はオランの攻防という同時代的な事件に題材をとり、さらにフェルナンドの上官アロンソ・デ・コルドバやイスラム教徒を率いるハッサン・パシャといった実在の人物を登場させるなど、写実的と言える特徴を有している。フェルナンドの英雄像は周りの人間の評価に依拠するもので³⁷、確かに強者と呼ぶにふさわしい勇猛さは発揮するものの、騎士道物語のごとき超人的な活躍が描かれているわけではない³⁸。また、名声など騎士の評判によって女性が恋に落ちる展開は騎士道物語的と言えるが³⁹、『気風のいいイスパニア人』のアルラハやマルガリータは、騎士道物語のように一定の型をなぞるのではなく、その内面的な性向や周囲の状況に反映する人物として描かれている⁴⁰。

『気風のいいイスパニア人』は、言うなれば史実と文学の融合である。そうした真実性を重視する物語世界において、騎士道物語的な英雄たり得ないフェルナンドは、いかなる英雄として描かれているのか。物語の終盤、フェルナンドはマサルキビルの防衛という形で英雄的な行為を果たすが、それまでの行動は、必ずしもコレアやカサルドウエロが言うような英雄的なものではなかった⁴¹。ヒューズの言葉を借りれば、『気風のいいイスパニア人』は名声に目を曇らされ、崇高な義務を怠る劇として解釈することもできる⁴²。フェルナンド自身も、自分が犯した過ち、つまり上官の命に背いて、国王に対する義務を放棄したことを認識している⁴³。

もし心から後悔し
過ちを告白することで
公正にして賢明な判官の怒りが
多少ともおさまるならば
遅きに失するが、悔恨の思いとともに
みずからの悪しき行為を認めよう

36 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, p.19.

37 *El teatro de Cervantes*, *op. cit.*, p.112.

38 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, p.17.

39 *Ibid.*, p.21.

40 *El teatro de Cervantes*, *op. cit.*, pp.100-102.

41 Gethin Hughes, «El gallardo español: A Case of Misplaced Honor», *Bulletin of the Cervantes Society of America*, XIII, 1(1993), p.67.

42 *Ibid.*, p.74.

43 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, p.40.

ただしひとつだけ言っておきたいのは
 その意図は汚名を被るものではなかったこと。
 このモーロ人から決闘を挑まれたとき
 私はやみくもに应じてしまった
 最高の猛者さえも押しとどめる
 命令に目を向けることもなく⁴⁴。

冒頭で述べたように、シミッチはこの作品を、『ドン・キホーテ』と同じく新たな騎士道物語への試みであると主張する。フェルナンドの行動には、ドン・キホーテのそれを想起させる面がある。ドン・キホーテも、たとえば漕刑囚と遭遇する場面において、体制側の権力に対して異を唱えている⁴⁵。国王やその権力の存在を認識しながらも、臣下としての義務と、自らの志との間に齟齬がある場合は、後者を優先させ、権威とされる存在に対して挑戦することも辞さない。

同時に、自身の行為によって科されるであろう処罰も認識している。サンチョの助言を入れる形ではあるが、あたかも身を隠すように、ドン・キホーテはシエラ・モレーナの山中へと入りこむ。自らを秘するという点ではフェルナンドも同じで、名前を偽り、改宗者としてふるまう。両者は、権威に対する反抗を自覚しつつ、みずからの志を貫く。

権威への挑戦は、ドン・キホーテが理想とする騎士道物語の英雄アマディスにも見ることができる。アマディスは、仕えていた王リスアルテが娘のオリアナをローマ皇帝に嫁そうとした際、王への服従ではなく、みずからの信条にしたがって行動する。そしてリスアルテの意に背き、思い姫のオリアナを奪還す

44 *Obra completa 13, op. cit.*, p.136.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Si confesar el delito,
 con claro arrepentimiento,
 mitiga en parte la ira
 del juez que es sabio y recto,
 yo, arrepentido, aunque tarde,
 el mal que hice confieso,
 sin dar más disculpa dél
 que un honrado pensamiento.
 A la voz del desafío
 deste moro corrí ciego,
 sin echar de ver los bandos,
 que al más bravo ponen freno.

45 前掲『新訳ドン・キホーテ [前篇]』, pp.207-210.

る。王権への反抗は、フランスの騎士道物語、たとえば『アーサー王の死』で語られるモルドレの王位篡奪などにもその例を見ることができる。『アーサー王の死』では、肉親同士の酸鼻な戦いが語られているが、アマデイスの物語でも、現在流布しているガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ版では改められているものの、それ以前のテキストでは、アマデイスがリスアルテを殺め、またアマデイスが息子エスプランディアンと戦って死ぬなど、凄惨な場面が描かれていた⁴⁶。

ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボはそうした壮絶な内容を改め、アマデイスとリスアルテを和解させた。さらに元々の枠組みを踏襲しつつ、大幅な修正を加えて、息子エスプランディアンの物語を世に送り出した。しかしこの『エスプランディアンの武勲』は、『アマデイス・デ・ガウラ』とは騎士道物語としての力点が異なっている。アマデイスと同じく英雄的な騎士であるエスプランディアンは、父を越えることを目指すが、その志は信仰に基づく聖戦によって果たされる⁴⁷。伝統的な騎士道物語でも、キリスト教は聖杯探求などの形で要素として取り入れられていたが、基本的には騎士個人の榮譽に重きが置かれていた。しかし『エスプランディアン』では、エスプランディアンの戦いは集団としてのキリスト教徒の勝利と結びついており、この点では『わがシッドの歌』など武勲詩に近いと言える。そこには『エスプランディアン』が著された当時のスペインの状況、つまりカトリック両王の治世における十字軍的な機運が反映していると考えられる⁴⁸。エスプランディアンにとって、護教こそが騎士としての本懐であり、彼の中では、自らの信条と果たすべき大義は軌を一にしている。

『気風のいいイスパニア人』が執筆された時代も、異教徒との緊張関係はつづいていた。レパントの海戦の勝利後も、オスマン帝国がキリスト教圏にとって脅威であることには変わりはなく、またスペイン国内では1610年にモリスコ追放令が出されている。こうした時代の風潮にもかかわらず、『気風のいいイスパニア人』においては、異教徒はかならずしも批判的には描かれていない。たとえばフェルナンドと対峙する異教徒の騎士アリムセルは誠実な騎士であり、一方キリスト教徒であっても、道化役とも言えるブイトラゴは、粗野で貪

46 拙稿「スペイン神秘思想と騎士道物語 —アマデイス、ロヨラ、サンタ・テレサ・デ・ヘススを中心として」、神戸外大論叢、第58巻3号、2007年、pp.39-41.

47 Garcí Rodríguez de Montalvo, *Sergas de Esplandián*, Ed. de Carlos Sainz de la Maza, Madrid, Editorial Castalia, 2003, pp.338-339.

48 拙稿「『エスプランディアンの武勲』における異教的要素」、神戸外大論叢、第60巻1号、2009年、pp.108-109.

欲な人物として登場する⁴⁹。

すでに見たように、フェルナンドは個人としての信条と臣下としての義務の葛藤に際して、アマデイスと同じようにみずからの信念にしたがって行動する。シミッチは『気風のいいイスパニア人』について「新しい騎士道物語」という視点を提示しているが、時代背景や題材となった史実を踏まえて考えれば、モデルとなるのは「エスプランディアン的」な騎士道物語がふさわしいだろう。しかしフェルナンドの行動は、むしろ「アマデイス的」と言えるものである。

フェルナンドは、結果的にはみずからの志と国王への義務を両立させている。しかしそこには、シミッチが述べているように、ドン・キホーテ的な悲劇が出来る可能性が内包されている⁵⁰。王に反旗を翻したアマデイスが栄光とともに王権との和解をはたすのは、リスアルテが奸臣の言葉に耳を傾けたという、一種の詩的正義を想定することもできる。しかしフェルナンドの場合、個人としての信条に従いながら臣下としての義務を全うできた点に、何の必然性も見られない。一つ歯車が狂えば、たとえばマサルキビルの防衛に遅参した場合、フェルナンドはドン・キホーテと同じ轍を踏むことになる。自分の信念を貫いても、遭遇した状況が望ましいものではなかった場合、たとえば相手が巨人ではなく風車小屋であったとき、その結末は滑稽かつ悲惨なものとなる。『ドン・キホーテ』にはそうした齟齬が描かれており、フェルナンドの行動の指針にはドン・キホーテのそれを連想させる面もある。それでもフェルナンドが英雄的であるとしたら、その理由は、現実と理想との相剋を生きる姿に求めることができるのかもしれない。

4. 結び

史実に基づく『気風のいいイスパニア人』では、現実とフィクションの融合を見ることができる。オランの攻防という実際の歴史的イベントに題材をとり、実在の人物が登場する。こうした枠組みとともに主人公フェルナンドの英雄的な活躍が単純に描かれているとしたら、『ヌマンシアの包囲』などと同じく、一種の歴史物語として読むことができるだろう。しかしスタップが主張するように、フェルナンドの「gallardo (気風のいい)」部分が否定的に描かれていると解釈した場合、この作品は、名声と現実との齟齬を描いた物語となる。つまりフェルナンドを含めた「現実」の人々が、名声という「フィクション」を求める形で、現実とフィクションの融合として解釈することができる。

49 *El teatro de Cervantes, op. cit.*, p.97.

50 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, pp.40-41.

『気風のいいイスパニア人』には、フェルナンド、マルガリータ、アルラハによる、一種の劇中劇がある。マルガリータの兄フアンがイスラム教徒の捕虜となった際、フェルナンドは素性を隠して異教徒としてふるまい、マルガリータはアルラハの姉妹ファティマと名乗り、フアンを混乱させる。セルバンテスは、戯曲においてしばしばこうした劇中劇を描いており、たとえば『気風のいいイスパニア人』と同じく『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』に収められている『不思議な見世物』では、劇中劇そのものが物語の主題となっている。『不思議な見世物』では、旅の一座によるペテンが描かれている。一座は、素晴らしい劇を演じるという触れ込みで、ある町を訪れる。ただしそれを観るためには、ユダヤの血を引いていないこと、そして嫡出子であることが必要だと主張し、実際には何も演じられていないにもかかわらず、観客に劇を観ているふりをさせる。この幕間劇は、架空の劇中劇を描いた戯曲であり、「演劇」というイリュージョンをめぐるイリュージョンとでも言える作品である。

ルネサンスや黄金世紀のスペインにおいて、人々は名声に対して高い関心を示しており、そこには他者の評価を重視する当時の世相を見ることもできる⁵¹。そのような時代にあって、セルバンテスは名声と現実の相違⁵²、つまりある人物が享受する名声と、その人物の生そのものとの関係に視線を向けている⁵³。『気風のいいイスパニア人』で描かれているのが、名声というフィクションであるとしたら、この作品は、「名声」というイリュージョンをめぐるイリュージョンとして読むことができるだろう。

51 *Ibid.*, p.29.

52 William A. Stapp, *op. cit.*, p.263.

53 «El libro de caballerías de Cervantes», *op. cit.*, p.33.